

第2回品川区地域福祉計画策定委員会 第二部 グループ意見交換 まとめ

テーマ：見守り・声かけ

- イベントなどをきっかけとして人と人がつながる時代。防犯意識の向上、他人への無関心などにより日常でのつながり構築は希薄。
- 生活している中で、地域の方の異変を感じたときに連絡できる場所があると良い。（ある場合はきちんと区民に周知されると良い）
- 民生委員の担い手がいない。気持ちがあっても年齢制限で対象外になってしまうことがある。
- 本人が他人からの支援を必要と感じていない場合において、専門職などの関与は、地域で自分を気にかけてくれている人がいるということを伝えるだけでも孤立感を緩和し、大変有効だと思う。
- 商店街では、子どもたちにできるだけあいさつや声かけをしていこうと話している。商店街のイベントで、地域の人たち、子どもたちが一堂に集まる機会にあいさつすることが、知らない人たちをつなぐきっかけになり、地域のつながりを深められればと思っている。
- 近所の子どもへ声をかけると、不審者と見られることがあるため、なるべく親がいるときに声かけをする。そうした挨拶については学校側からも何か発信してもらえるとありがたい。
- 「83運動」が始まった頃は高齢者の方が散歩したり、立っている姿を見かけたが最近は見られない。PTAだけでなく、もっと地域の人たちに広がると良いと思う。
- 鉄道会社全体として「こども110番の駅」をやっている。何かあった時に子どもたちが避難しやすい場所として地域づくりに貢献していきたい。また、振り込め詐欺の受け渡し場所が駅になることがあり、ソワソワしている人に声かけをして未然に防いだという事例も何件かあった。

第2回品川区地域福祉計画策定委員会 第二部 グループ意見交換 まとめ

テーマ：地域交流

- 高齢者を中心とした町会、高齢者クラブの会合が多々あり、体操、カラオケ、絵手紙など趣向を凝らして楽しい行事を企画することにより、閉じこもりがちな高齢者に参加してもらおうと実施している。
- 学校を通して防災訓練などを開催すると、大人と子ども多世代にわたって参加が見込める。行事に親子で参加しても、親に役割を与えすぎると自分の子どもとの交流の時間が減少してしまうため、ゆるやかな関わりの中で地域行事に参加してもらうことが大切。
また、参加者同士で防災の意義やどう集まれば良いかなどを一緒に考えることで、コミュニケーションが出てくるのではないかと思う。そうした中で、日頃の町会間の情報交換をできるようになると良い。
- 事業者においては、バリアフリー体験や、運動会、中学校や地域の商店街を巻き込んだ演奏会も継続している。主な目的は参加者と地域のつながりを深めることで、参加者の増加が目的ではない。
- 交流する行事への参加者も固定化しがち。お花見など、転入者も地域に馴染んで参加してもらえるようにしたい。
- 認知症カフェには、当事者やその家族だけでなく、認知症予防に関心を持った地域の方が参加してくれている。
- 地域交流を活発にするには多世代が参加できるイベントが有効。散歩の途中などで自然に目に入るふれあい掲示板が大変有効。
- 交流の参加者でもあるが、中学生・高校生・大学生はボランティア活動の意欲がある生徒が多い。中学生・高校生が小学生の相手、水まき、大学生ではみこし担ぎなどを率先して取り組む。表情が違い生き生きしている。貢献意欲のある学生を義務的でなく自分たちも楽しみながら参加してもらうことが大切。
- 大学のグラウンドなどで交流ができると良い。

第2回品川区地域福祉計画策定委員会 第二部 グループ意見交換 まとめ

テーマ：生活支援

- 町会・自治会の加入者も減少傾向。どのくらいの頻度でどんなことをやるかが見えないので、やる前から負担になると感じてしまう。
- 地域のあらゆる困りごとの相談は役所へ行くのは物理的・心理的にハードルが高い。小学校区程度の規模で、いろんな職種の方が曜日・時間に応じた出張相談に応じるような機会がほしい。
- 地域の身近な場所に集える場所がほしい。現在実施しているほっとサロンなども含めて、そこに集まった人同士で悩みや困りごとを共有することで、専門職でなくても解決できることも多い。そうした場所を増やすことと、そうした場になかなか参加してもらえない閉じこもりがちの方についてどう接していくか、普段の声かけが大切。
- 学生ボランティアは授業の単位取得としての活動が多く、地域イベントの従事が中心である。福祉系のボランティアも組み込んでもらえないか学校側に働きかけてみてはどうか。福祉人材の確保になればなお良いが、啓発の一環にはなると思われる。
- 担い手の育成として、一般的なお祭り、地域イベントなどのボランティア参加者に対して、イベント後に障害者の移動支援講習を無償（通常 2 万円程度）で受けられるような取組みがある。受講いただくことで、担い手の育成だけでなく、啓発活動の一環としても非常に効果がある。
- 日常の困りごと、爪切り・耳掃除が自分ではできないという方が多いが、これらは医療行為であり、ボランティア、ヘルパーでは対応不可であるものの、このために訪問看護をお願いするのも気が引ける、というのが実情。医療行為との関係も調査の上、有資格者や一定の講習を受けた方に対応をしてもらえれば、ボランティアと専門職との狭間の対応が可能になる。
- フレイル予防の取り組みをより広めていく。
- ボランティアというと、災害ボランティアはイメージしやすいが、日常生活のボランティアというのはイメージしづらい。生活支援のボランティアについて、一般の方への周知の工夫が必要。

第2回品川区地域福祉計画策定委員会 第二部 グループ意見交換 まとめ

テーマ：市民学習・理解促進

- 人の支援が必要になる前の将来を見据えた学習の必要。成年後見制度など自分のアドバンスケアプランを考える機会が必要。
- 学校を軸にした教育として、ボランティアは子どもたちにもよい経験になり、施設の高齢者も大変よい影響があると感じた。直接会い、関わることで子どもたちもキラキラするが、高齢者も若さに接することでイキイキする。人と関わることの重要性と体験を通じて学ぶことは大きな理解につながる。
- 高齢者や障害者など、その人の立場になってみる、その立場の方々から意見をいただくということを通じて、初めて相手の立場を理解することができる、相互理解を深める基本である。
- 高齢者、障害者のすべての方が常にお困りであると考えるのは偏見。その人にとってどこまではやってほしいことで、どこからは踏み込まないでもらいたいと思っているかを理解して接することが大切。必ずしも助けを必要としているわけではないということを確認したうえで、おせっかいになりすぎない適度なつながりを絶やさないことが大切。
- 認知症カフェの開催では、ハードルを低く、参加しやすくすることが大切。医療機関にかかっていない人にどうアプローチするかなどの課題も、まずは相談しやすい、相談できる場を作っていくことが大切。携わる方も、地域の方に参加してもらおうと交流といった点でも良い。
- 事業者の研修では、利用者の多様性の理解、啓発の充実を図っている。心の多様性についても、見た目で判断しないような教育を始める。
- バリアフリーの観点から、身体的にバスや電車で移動できなくなってくると、タクシーでないと移動できない状態になることもあるが、車いすでタクシーに乗ると、乗降場所によっては大変移動がしづらい場所がある。まちづくりを考える際に、本当の意味でバリアフリーを必要としている方の視点をぜひ取り入れて考えていただきたい。

第2回品川区地域福祉計画策定委員会 第二部 グループ意見交換 まとめ

その他

- 地域の高齢者クラブの名簿を会員の皆さんに配ってはいけないと言われる。個人情報保護の制約はあると思うが、一定のルールを示した上で、情報を共有することは必要だと思う。
- 地域活動をしていると、個人情報の保護が大変難しい。個人情報の壁を乗り越えて命を守るしくみができる地域での支え合いがしやすくなると思う。
- 広報紙は新聞を取っていないと取得が困難。子どものいる世帯へのお知らせは学校からのメール連絡などを活用できないか。
- ふれあい掲示板など目に入ることが大切。スマホでも見られるようQRコードをつけるのはどうか。
- 区全体でなく、小さな地域、地域センター単位での関係者が集まる、顔の見える関係づくりができれば身近な地域の課題解決が図れるのではないか。